

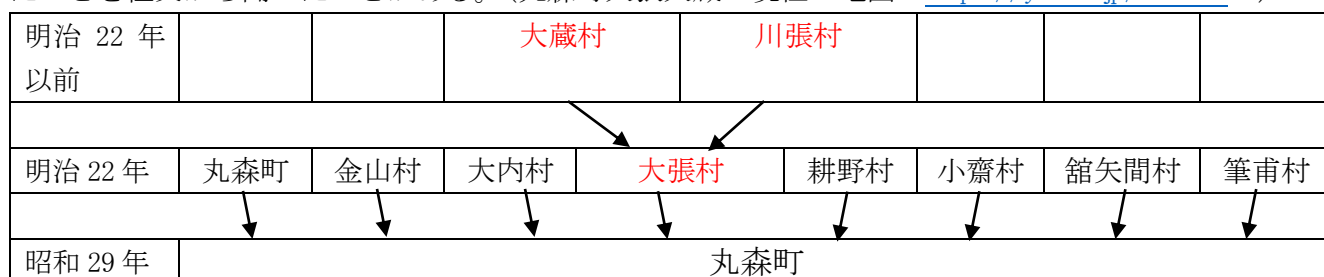
村のルーツと地名の由来を探る
一年を過ごした山奥の村はこんな村だった

<1> はじめに

昭和 30 年から 31 年にかけての一年間（小学校 5 年～6 年）、家庭の事情により母の実家がある宮城県の山奥で過ごした。宮城県伊具郡丸森町大張、宮城県の南端で福島県との県境にあり、東北本線の白石駅と阿武隈川に挟まれた山村だった。

丸森町は明治 22 年の町村制施行によって誕生し、昭和 29 年(1954 年)に周辺の村（金山町・大内村・大張村・耕野村・小齋村・館矢間村・筆甫村）を合わせて現在の形になった。

大張村は明治 22 年の町村制施行の時に、それまでの「大蔵村」と「川張村」が合併して誕生した村で、両村の一文字ずつを合わせて新しい村名にした。母の曾祖父が、明治中期にこの大張村の村長をしていたことを祖父から聞いたことがある。（丸森町大張大蔵の現在の地図 <https://yahoo.jp/eFMfYI>）



<2> 村のルーツを探る

「大蔵村」の名前は、村の中央部（市ノ沢）にある大蔵寺（だいぞうじ）と関係があるらしい。弘仁元年、京より東進してきた小野篁がこの土地を荒らす 3m の大猪を虚空蔵様の力を借りて退治した。猪の霊を慰めるために、祠を建てて虚空蔵菩薩を勧請して祀り、後に大蔵寺を建立して本尊として安置した。臨済宗東福寺派の寺で、村の人は「虚空蔵さん」と呼ぶことが多かった。角田市にある高蔵寺・斗蔵寺と合わせて伊具の三蔵寺として古くから地元の人に親しまれたお寺らしい。大蔵寺が建ったことで「大蔵」という地名が誕生したと想定するなら、寺名の由来が気になるので調べてみたがわからなかった。一方の「川張村」は、小野篁が猪を退治した後で皮張りをした石（皮張石）が地名の由来。鍬（やじり）を研ぐのに使った砥石も残されているとのこと。

延暦 20 年（801 年）坂上田村麻呂が平安京を出て東征を開始。弘仁 6 年（815 年）小野岑守（みねもり）が陸奥守として福島に入り長男篁とともに地域の開発振興策に汗を流したのが現在の福島県小野新町。小野篁がどうやってどの辺まで進出していたのかは定かではないが、大蔵・川張にも関係していたとは驚きだ。平安時代に遡る歴史を持つ里だとわかると、何やら誇らしい気分になってきた。

伊具郡の過去に遡ると、中世には「伊具荘」という荘園になっていた。和名抄に「伊久荘」と、国造本紀に「伊久国造」となどの記述があるとのこと、どうやらそれなりの歴史があるようだ。

1051 年の前九年の役は陸奥六郡の司安倍貞任と陸奥守源頼義の戦い。清原武則の協力を得た源頼義が安倍貞任を滅ぼし、陸奥六郡は清原の手に渡る。1083 年清原真衡・清衡・家衡の争いに源義家が加わり後三年の役となった。清衡が勝利を収めて、陸奥六郡と出羽の山北三郡を手中にし、奥州藤原の初代となった。藤原清衡は、安倍貞任の妹（前九年の役で清原武貞に再嫁した）の連れ子で父は藤原経清。経清は安倍頼時の婿となり亘理（現在の伊具郡の隣の亘理郡）の権太夫。同じ安倍頼時の婿になった平永衡は伊具十郎と呼ばれていて、伊具を押さえていたが、讒言によって源頼義に切られてしまう。

伊具荘は、古代のように地方の豪族が伝統的権威によって人民を統治する形ではなく、外来の領主が水田の開発などを根拠に知行をする形で乗り込み、翻弄された荘園だったようだ。

後に伊具十郎永衡の後継に当たる人が、王家につながるのある人に縁を求めて、この土地を寄進したことで、王家領荘園のひとつ（八条院領）となったらしい。

<3> 残っている古い地名

昭和 30 年代の丸森町大張での日常の暮らしの中では、個人の家や人の名前を語るときには「住所表示上の字名」「屋号」を使用することが多かった。住所表示の「小字」となると「特定の一軒」になることもあり、複数の家が存在する場合もある。また同一字名・同一屋号でも「本家」「新宅」となることもある。同じ苗字が多い土地であることも含めて、よそから転入してきた私には物珍しかった。

現在の住所の表示は、「丸森町金山」「丸森町大内」・・・という風に昭和 29 年の合併の経緯がわかるような表示名になっている。さらに、私が住んだ丸森町大張という土地に絞ってみれば、「丸森町大張大蔵」「丸森町大張川張」と明治 22 年の二村合併の経緯までわかるようになっており、この下に字名が今でも残されている。昨今、市町村合併が行われると、意味のわかりにくい新しい市町村名が付けられて



古い地名は消えてしまうことが多いが、この地については見事に旧地名が残されており、歴史探索の入口が残っている。

時は流れて令和元年、ある日懐かしさを辿って「地図」や「地名」を確かめている内に、「昭和 30 年代の地名が残っている」ということに気づき、にわかに様々な思い出が蘇ってきた。

「宮城県伊具郡丸森町大張大蔵」の現在の住所表示上の地名（字名）を Yahoo の地図情報から調べてみたら、私が住んでいた「**広萱**（ひろがや）」を含め [37](#) 存在することがわかった。

広萱は、白石市との境界になる 200~300m の稜線上の砂山 (273.7m) の南東麓にある。海拔約 200m の小さな窪みが緩やかな傾斜の丘のようになった所で、おそらく「萱の原」が広がっていたことが由来ではないかと思う。

隣の進ちゃんの家は「**池ノ入**（いけのいり）」、その南側の月子ちゃんの家も同じだった。「池の入口」を意味する地名なので、絞り水を蓄える溜池があったのかもしれない。

母の実家から小学校までは徒歩で約一時間。

夏から夏までの約一年間を過ごしたので、田舎の村の季節の移ろいを肌で実感することができた。そんな記憶を掘り起こしながら、大張に残された地名を整理してみることにした。

<4> 水・水辺に関連する地名

海拔 200m 程度の小尾根が入り組む地形の中、殆どの家が山を背負うように立ち、山からの水を利用して暮らしていた。水田の脇の小さな沢の絞り水のような流れがあり、ザリガニを取りに行った記憶がある。阿武隈川の支流の小田川の水源になる枝沢のひとつで、この辺りは柳沢と言われていた。現在の国土地理院の地形図を見ると上流には「上柳沢」、下流には「下柳沢」と表記がある。ところが、住所として残っているのは「**下柳沢**」と「**中柳沢**」だけなのが不思議だ。県道の分岐点（海拔 184m）に柳沢公民館があり、盆踊り・演芸会・餅つきなど地域の主要な行事が行われていた。文字に書けば難しくもない「柳沢（やなぎさわ）」という地名も、耳で聴くと他所から転入してきた私には、何度聞き返しても「やんきさわ」としか聞こえなかった。

阿武隈川からは遠く離れた山間の里、水に恵まれぬせいだろうか山肌の凹みにいくつかの溜池が散見し、**池ノ入**・**小沼**・**清水**などの地名が存在するのもそんなことによるのかもしれない。

小学校までの道のりの半分を過ぎた峠近くに大きな溜池があった。海拔 239m、旧大蔵村エリアの農業用水だったと思うが、台風が来た時に溢水寸前まで水位が上がったことがあった。学校の帰り道に恐る

恐る堦に上がって見て驚いた。「堤が切れたら大変だ」と慌てて帰った記憶がある。その晩は停電になりランプで過ごしたように覚えている。結局、溢水することもなく終わりはしたが、緊張の一夜だった。昭和 30 年 10 月、紀伊半島に上陸して仙台湾に抜けた台風 26 号だったと思う。

大蔵寺に向かって緩い傾斜を上っていくと「市ノ沢」という所があるが、こんな山中に「市場」が立ったとは思えないので、仏僧の「市」と関係した地名なのだろうか。

沢・沼・清水など小さな流れを感じさせる地名の中で、ひとつだけ異彩を放つのが「川前（かわまえ）」。
大きなうねりを持つ川の流れを思わせる厳めしい地名だが、小さな流れの岸辺の地名。旧大蔵村から旧川張村に入る入口になる三叉路がある所で役場や郵便局がある大張村の中心地の集落。峠から長く下って、ここは海拔 139m、この川に名前があったかどうか記憶にないが、3~4Km ほど流れると阿武隈川に合流してしまう。おそらく昔は、奥地の低山からの水を集めた一人前の川だったのかもしれない。

<5> 地形に関する地名

大きな平坦地を意味する「大平（おおひら）」は、大蔵寺近くの、山を背にした所にある。小学校への道の途中にある「高平（たかひら）」も山を背にして県道から少し上ったところにある平坦地。

毎朝通う小学校への道、数人で歩き始めると、谷間から山間から合流して、この辺りまで来ると賑やかになってくる。そして高平を過ぎると緩やかな上り勾配が始まる。

岡の上の田圃を意味する「岡田」は、地名を見ただけでも水が不足していそうな感じがする。

大蔵寺を頂点として県道を底辺とする三角形の中に「大蔵畑（おおくらはたけ）」という地名が東西に広がっている。航空写真を見ると確かに畑の広がり認識できる。堂山山麓の大きな凹みのようなところを開拓して畑にでもしたのだろうか。地名がユニークなので気になったが詳細は不明。

<6> 石・岩に関する地名

堂山（350m）の頂上に勧請建立した虚空蔵菩薩は大蔵寺の女人禁制の修験の場だった。参拝者が願い事を書いて花立てして参拝した。この時に願いを書くのに使われた「石の凹みに溜った水」が「硯石」として残されているらしい。

「田と石の混ざった地名」は、一般的には水田に適さない土地を表していることが多いが、この地の場合はどうだろうか。70~80m 程度の起伏の中の小沢の枝沢のような所では山から出てくる水は少量で、しかもその田圃がゴロタ石を含んでいたら保水性の上でも問題があったと想像できる。

山の斜面を使った広い畑には桑が植えられていて、かなりの農家で養蚕をしていた。今でも丸森町は「蚕の里」と言われているようだし、大張小学校の校章は「繭と糸巻き」をイメージしたものになっている。

64 年前には校歌もなかったもので、校章があったかどうかは記憶にない。

何軒かの先見性のある農家が、コンニャク作りを始めたりしているのが昭和 30 年代初頭の状況だったが、稲作に適さない地形が多かったということなのだろうか。

「田石（たいし）」と言う地名は、何か伝説伝承がありそうな気がして調べてみた。前述の硯石・皮張石をはじめとして丸森町には古くから伝わる巨石伝説がいくつもあるようだし、田石の北西方向の大蔵山には伊達冠石の採掘場がある。伊達冠石は玄武岩質安山岩で鉄分を多く含んでいる。現在採掘場には展示施設もあるようだが、昭和 30 年頃にはそのようなことは知らなかった。田石についての伝説伝承は特に発見できなかったが、何か面白い伝説があるような気がする地名である。静岡から転入してきた私にとって、「てーす」という発音だけが強く印象に残った。

柳沢公民館の前の T 字路を東へ（角田市方面）へ進むと左手の山を背にして「銅谷」という所があるが、鉱山があるわけではなく、地名の由来が気になる。

<7> 倉に関する地名

一般的に「くら」と名がつく地名は、収納場所を意味する「蔵」から来ているものが多いが、地形の特徴として「岩場」を意味する「崑（くら）」から来ているものも多い。さて、「小倉（こぐら）」・「矢ノ倉」

「松ノ倉」などこの「倉」は何だろう。

矢倉は武器を収納する場所を意味するので「矢ノ倉」はその変形かもしれない。江戸時代に伊達政宗に従って諸戦に参戦した者が住んでいたようなので、伊達藩の矢倉があったのかもしれない。

<2>項で述べた「大蔵村のルーツ」は、川張や周辺の村に残る巨石伝説も考え合わせると、「大きな岩山のある里」ゆえに地名が「大蔵」となり、その地に建てた寺ゆえに「大蔵寺」とも考えられる。

<8> 樹木や植物に関係する地名

「松」が付く地名は全国各地にあり、かなり多い部類に入るように思う。「笠松」「四本松」「松ノ塚」などは何か伝説がからんでいそうな感じがして調べてみたがわからなかった。

竹は100年から120年に一度花が咲き、花が咲くと竹が自死してしまうことから、縁起の悪いもの、不吉な出来事の前兆を意味し、恐れられていた。そんな忌み言葉である「竹ノ花」が地名に使われているのは何とも不思議な気がする。

「由ケ入」は小田川と阿武隈川の間の中間部にある小さな谷津のような所なので、由来は「葎が入り」かもしれない。

<9> 寺社・神仏に関係する地名

「堂山（どうやま）」という地名は虚空蔵様がある堂山の山麓にある。「寺前」は大蔵寺の南側にあるので、「大蔵寺の門前」を意味するものだろう。

「愛宕」と「明神」は大蔵寺からは遠く離れて、柳沢公民館の近くにある。寛永年間の検地資料の中に、大蔵村の鎮守社として愛宕社が記され、神明社などいくつかの神社が記されているので、昔は何かあったのかもしれないが、いずれも祠を見た記憶もない。明神の南側の小山の上に村の共同墓地があり、母方の先祖の墓があるので、何度か歩いたことがある。

「美録（みろく）」という地名の由来が気になった。「美禄」という言葉はあるが「美録」という言葉は存在しないらしい。しかし人名として探してみると岡山県を中心に関西方面に存在する姓のようだ。「弥勒菩薩」からの変形だとすれば・・・と勝手に想像したが、詳細はわからなかった。

<10> その他

「越戸（こしど）」「中ノ内」については、いずれも言葉の持つ意味が想像もつかないので、まったく地名の由来が掘り出せず諦めることにした。

現在の地名としては残っていないので、何らかの事情により消滅したのか、屋号だったのかわからないが、耳に残る地名がいくつかある。小さな沢から小山に入ったところにある「田向（たむかい）」は遠縁にあたる家だということで、おばあさんに随分世話になった。周辺の風景が思い浮かぶような地名だ。母の実家から県道を渡って桑畑の間を抜けて小山を越えると「いむしろ」と呼ぶ家があった。屋号だったのかもしれないが、「藪の筵」だろうか、「猪の筵」だろうか、今になって気になる地名だ。

県道を白石方面に向かうと徒歩15分か20分位で隣家があった。耳で聞くと「かなござわ」と聞こえたが、「金子沢（かなござわ）」だった。どの家も山を背にして建ち、後ろの山から出てくる水を使って暮らしていた。金子沢も小さな沢を暮らしの支えにしていたのだろう。

母の実家は白石市との境界に近いので、峠を越えて祖父母を訪ねてくる来客も多かった。熊野田・十文字・大鷹沢・大原など、印象に残る地名がいくつもあった。

峠を越えて白石市側には旧大鷹沢村があった。大鷹が棲む沢「大鷹沢」、熊が出没する「熊野田」はその土地をイメージできる地名で、景色を想像するだけで緊張したものだ。

峠を越えた所にある「大原」から大張小学校まで通っている兄弟がいた。兄の名前は正一（しょういつあん）と言った。雨が降っても雪が降っても毎日峠を二つ越えて片道1時間半の通学だった。大原は峠の北側のやや平坦な場所があるところだった。

峠を越えてさらに下った「十文字」という集落から、祖母が開く裁縫教室に通ってくる娘さんがいた。今あらためて地図を見ても十字路は見当たらず、なぜ十文字なのかわからない。

僅か一年間住んだだけの、終って見れば通過点に過ぎない山間の里ではあるが、何故か郷愁を動かすものがあり、忘れがたい。地図を眺めながら思い出した事をメモしていくと、まだまだ出てくるような気がする。結句を「残しておきたい昔の地名」として、まずはこのあたりで締めくくりとする。

以上